

# 町長への手紙・ご意見箱

芦屋町では、「まちづくりは町民全員が協働してつくるもの」と考え、町政への提案や意見などをいただく「町長への手紙」と、「ご意見箱」があります。今回は、令和4年度にいただいた町長への手紙・ご意見箱の中から抜粋して紹介します。

▷問い合わせ 広報情報係 (☎223-3569)



## 手紙 狩尾岬散策道案内板 近くにベンチを設置してほしい

毎日狩尾岬をウォーキングしていますが、沖を見ながら一休みするとき座るところがなく、階段に座って休んでいます。ほかの仲間もベンチがあれば助かると思っています。設置してくれませんか。

(80歳代・男性)

## 対応 要望の場所にベンチを設置しました

サイクリングやウォーキングに利用する人の利便性が向上すると考え、福岡北九州県土整備事務所の許可を得て、ベンチを設置しました。



(産業観光課)

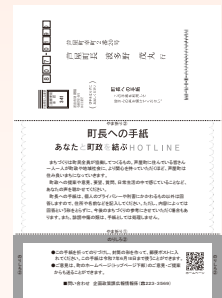
## 手紙 町長への手紙を簡単な つくりにしてほしい

町長への手紙の作り方が難しく高齢者には大変です。簡単な手紙にしてほしいです。はさみやのりを使わなくてもよいものにしてください。

(匿名)

## 対応 町長への手紙の様式を 改善しました

住民の皆さんが簡単に町長への手紙を作成し、出せるように町長への手紙の様式を改善しました。はさみを使わず、専用紙を折ってのり付けするだけで出せるようにしました。



(企画政策課)

## 令和4年度 受付状況

### ■年代別受付人数

	町長への手紙		ご意見箱	
	受付(人)	構成比(%)	受付(人)	構成比(%)
19歳以下	0	0	0	0
20・30代	7	9.1	7	33.3
40・50代	17	22.1	6	28.6
60歳以上	28	36.4	3	14.3
不明	25	32.4	5	23.8
計	77	100.0	21	100.0

### ■性質別受付件数(1通に複数の内容あり)

	町長への手紙		ご意見箱	
	受付(件)	構成比(%)	受付(件)	構成比(%)
意見・提案	7	7.1	8	30.8
要望・苦情	87	87.9	17	65.4
お礼など	5	5.0	1	3.8
計	99	100.0	26	100.0

○町長への手紙やご意見箱は、町民の皆さんの声を町政に反映させるためのものです。まちづくりの提案や意見、日常生活の中で感じていることをお寄せください。

○町長への手紙やご意見箱は、個人のプライバシーや利害にかかわるもの以外は、差出人へ返事を送ります。できるだけ、名前と住所などを記入してください。なお、誹謗中傷の類は受け付けません。

▷町長への手紙(用紙)の設置場所  
役場2階企画政策課、町民会館、中央公民館、山鹿公民館、芦屋東公民館

▷ご意見箱  
町のホームページ(トップページ下部)にある「ご意見・ご提案」からお寄せください。

# 芦屋歴史紀行

その三百二十六

## 維新前夜と山鹿流①

芦屋歴史の里特別展「維新前夜と山鹿流」の開催にあたり、今回は尊王の士として全国を遊説し、芦屋を訪れ句を残している高山彦九郎正之を紹介する。

彦九郎は尊王家で遊歴家である。江戸時代中ごろの人で、「寛政の三奇人」として有名な人物である。彼は江戸時代の爛熟期の文化・文政時代に代（1804～1830年）よりもずっと前の生まれで、彼の生きた時代は幕末のような荒ぶる政治の時代ではなかった。幾度か日本の沿岸にロシア船や西欧の遠洋用の船が出没し始めている時期とはいえ、一般の人々にとって、世は徳川幕府のもとで天下泰平であった。そのような時代に彼は、「日本には天皇という潜在的君主が居られる。将軍・幕府はその風下に立つべき存在である」という、当時としては珍しい尊王論を説いてまわった。彼は誰に師



△彦九郎の銅像  
久留米（遍照院）

という、当時としては珍しい尊王論を説いてまわった。彼は誰に師

- 事していたわけでもなく、ひたすら自分の足で街道を、山野を踏み分け、諸国の賢者、学者などを歴訪し、会えば志を述べ、意見を交換し、意気が通じれば抱き合って涙き、次の目的地に急いだ。十分な学識を持ち合わせながら一冊の書物を著すこともなく、ある時突如、腹を切った。彦九郎の出現は、遙か未来の幕末揺籃期の尊王思想の呼び水となった。諡号（戒名）は「松陰以白居士」。吉田松陰（幕末の思想家・教育者）の名は、この彦九郎の諡号からとられている。
- 延享4（1747）年  
上野国新田郡（現群馬県太田市）生まれ
- 明和2（1765）年  
18歳で家を出、各地を遊歴し、尊王論を説く
- 寛政5（1793）年  
5月29日  
山鹿来訪 山鹿狩尾宮神官、波多野庸成と談じる
- 安徳天皇の行在所や津軽女仙物語などを宮司より聞く
- 波多野宮司家に宿泊

## ◎6月1日

● 祇園社（須賀神社）・狩尾大明神などを参拝。名所浪懸けの岸を見る「浪懸の岸打音も 静かなる 御代のためしと聞そ楽しき」彦九郎

## ◎6月2日

● 彦九郎・波多野庸成・秋枝広成の三人の会談が弾む

「た々津くしよしと来てなく蝉の声なつの山鹿の梢にそ聞く」庸成

「聞人の有にそ語る空蝉のむなしく時を過こすと思ハて」彦九郎

「思ひきや葎の宿の秋またてこき言の葉の色を見んとハ」庸成

「言の葉のさかゆく宿と聞からに尋ねし山のかいそ有ける」彦九郎

## ◎6月3日

● 彦九郎は浪懸の岸あたりを歩いた。

「浪懸の岸に望めばから（唐）国も海をひとへのとなり也けり」彦九郎

彦九郎が山鹿の波多野庸成宅に滞在していたとき、狩尾神社の大祭が執り行われ、神官たちが大楽を奏じた。このとき彦九郎は礼装して端座し、大神楽が終わるまで膝を崩さなかった。謹厳なその態度に見る人はみな胸を打たれたという。



△彦九郎の歌碑  
（浪懸遊歩道入口）

## ◎6月4日

● 彦九郎は庸成宅を辞し、遠賀川を渡った。（遠賀川を渡る、百二十五間、右の方垂間野の橋の跡坤（西南）に渡る。芦屋に橋本と有橋杭も有と伝ふ、渡りて芦屋町也千軒」と日記に記されている。

◎6月27日  
久留米の友人、森嘉膳宅にて自刃（芦屋歴史の里）



△彦九郎の墓  
久留米（遍照院）

## 編集後記

▼1000号特集の取材のために過去の広報あしやを読むと、町の歴史や広報担当者の思いが伝わってきました。今後も町民に愛される広報紙作りを頑張ります。（手塚）  
▼20年役場で働いていてもどこかよそ者感がある私ですが、古い広報を読んで歴史に触れると、少し芦屋人になれた気がしました。（那木）  
▼1000号発行に携わることができ、光栄に思います。今回も取材にご協力してくれた皆さんに感謝です。過去に広報に載ったよという皆さん、その後の活動や影響など近況報告を投稿してみませんか。待っています。（欽守）

